

## 三重県の道徳科の現状と今後の方向

岐阜聖徳学園大学教育学部 河合 宜昌

### <年度当初の道徳科の現状>

- 道徳科への意識はかなり高い。特に、管理職の意識は高く、中学校では来年度のことを考えると危機感を感じている。
- 道徳の時間が特設されてから不易の部分である道徳の特質（内面的資質の育成）についての理解が更に必要である。人権教育を推進していく上で道徳の時間の実践は継続してきているが、年度当初に参観した中学校の道徳の授業では、授業の出口で具体的な実践策（具体的な行為）を見つけ出す学級活動に近い学習指導過程となっていた。

### <現状をふまえた意図的・継続的な指導>

- 研修の第1回目は、道徳の特質や新たなキーワード（「考え、議論する」等）について具体的な例をあげながら説明し、共通理解を図った。
- 道徳科の授業の具体的なイメージをもてるように、体験授業（講師が学級担任、教員が児童生徒）を行った。道徳の授業を進める中で、具体的な手立てやその手立ての意味を解説するなどして、道徳科の授業がすぐに実施できるようにした。
- 研修の第2回目からは道徳科の特質をふまえた授業ができるように道徳の読み物教材の分析や具体的な指導の手立てについて教員に問いかけながら説明した。また、授業者や学校とメール等で連絡を取り続け、指導案を作成するに当たって具体的な助言を継続的にした。
- 授業研究会では、常に、道徳の特質や新たなキーワードと研究授業とつないだり、具体的な手立てを示したりして助言をした。
- すべての学校で道徳科について共通理解をするために、各市町の指導主事の役割は重大である。各市町の指導主事は各学校で道徳の研修会や研究会が行われたとき、各市町の学校へ呼びかけるようにすすめたり、指導主事に向けて研修会を開いて質問をうけて答えたりするなど、指導主事の力量を高めるようにしてきた。

## <2学期を終える現在の道徳科の現状>

- 2学期になり、研究授業が行われるようになり、道徳の本質をふまえた学習指導過程になってきている。
- 11月15日の有田小の研究協議、11月19日の中原小の研究協議では質の深い討議がなされた。道徳の特質を大切にしながら授業でどのように指導や指導・援助をしたいったらよいのか、具体的な発言がよく見られた。
- 11月14日の城東中の研究授業では、この時間に扱う読み物教材を自ら実践して、研究会に参加している教員もあり、実践への意欲が高まっていることを感じる。研究会でこれだけ教員が集まってくるのはめずらしく、道徳科への意識の高さも感じ取ることができた。
- 11月5日の笹尾東小、11月7日の羽津小の授業では、自分の考えをすすんで発言する姿が多く見られたり、道徳の時間に自信をもって発言しようとする姿が見られたりした。子どもの表情がすばらしかった。
- 10月29日の久居東中の授業では、家族愛のねらいから自分を深く見つめる生徒の姿がみられ、道徳の特質をふまえた授業が展開され、生徒の姿も高まりを感じることができた。
- 子どもの高まりにともなって、教員の道徳科の授業への意欲も高まりつつある。道徳推進教師が「推進だより」を出すとき、推敲してほしいというメールでのお願いもいくつかあった。

## <今後の方向>

- 道徳の特質をふまえた学習指導過程にはなってきたが、具体的な手立てについてまだ、不十分である。特に、基本発問と予想される反応、考え方や感じ方を深める指導・援助、道徳ノートの活用等について、実践を継続的に積み上げる中で、教師の力量を高めていく必要がある。
- 授業の子どもの姿は高まってきたが、まだ、十分とはいえない。自分の考えを堂々と仲間に伝え、交流する中で、ねらいにかかわる道徳性を高め、自己を見つめる子どもを育成していきたい。

## 道徳科の目標の中の「道徳性」は、どのように考えればよいのでしょうか。

道徳科の目標（小学校学習指導要領 第3章 特別の教科 道徳 第1）は、「第1章 総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」です。

それでは、ここで書かれている「道徳性」について考えてみましょう。

今回（平成29年）の改訂で、道徳的実践力と道徳的実践という用語がなくなりました。道徳的実践力の育成は、心（内面的資質）の育成になります。

実践力という用語がよく出てきます。例えば、学校の研究主題の中に「〇〇を育てる実践力の育成」や人権教育の中での実践力の育成などと使われています。そこで、行為を育成するという捉え方にならないように、「道徳性」という用語になったのではないかと考えます。

それでは、道徳科では、心と行為の両方を育てることなのでしょうか。

道徳科の目標を見ると、最後の方に、「道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」と記述されています。この内容は、従来の道徳的実践力の内容、つまり心（内面的資質）の育成にあたります。

すなわち、道徳科でいう「道徳性を養う」というのは、心（内面的資質）の育成の部分であり、行為の育成ではないということになります。

一方で、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育は、行為と心の両方の育成になります。

今回の改訂で、道徳的実践力という用語が「道徳性」という用語になりましたが、これまでのように、道徳科は、心（内面的資質）の育成をしていく時間であると捉える必要があります。したがって、道徳科で「道徳性」を養うといっても、あくまでも心（内面的資質）の育成であり、行為の育成に関わる発問をすることは、道徳科の特質に合っていないということになります。



## Q4

## 道徳科の目標の中の「道徳的諸価値について理解する」を、どのように考えたらよいのでしょうか。

道徳的価値とは、よりよく生きるために必要とされるものであり、人間としての在り方や生き方の礎となるものです。そのために、学校教育では、児童一人ひとりが道徳的価値観を形成する上で必要な価値を、発達の段階を考慮しながら、内容項目として取り上げています。今回（平成29年）の改訂で、内容項目の数が、低学年は16項目から19項目、中学年は18項目から20項目、高学年は22項目のまま、中学校は24項目から22項目になりました。この内容項目は、道徳的諸価値が含まれたものになります。

それでは、「理解する」について考えてみましょう。ここには、3つの理解があります。

1つ目の理解は、「価値理解」です。人間としてよりよく生きる上で大切なことを理解することです。道徳的価値のよさ、すばらしさ、意義を理解することです。具体的には、「親切にすると、相手も自分も気持ちよくなるなあ。」「目標に向かって努力をして達成できると、次もまたがんばろうという気持ちが高まるなあ。」などが考えられます。

2つ目の理解は、「人間理解」です。道徳的価値は大切であってもなかなか実現することができない人間の弱さなども理解することです。具体的には、「困っている人に親切にすることの大切さはわかっているけれど、恥ずかしくてなかなか声をかけることができないなあ。」「きまりを守らなければいけないことはよくわかっているけれど、つい急いでいると迷惑をかけることがあるなあ。」などが考えられます。

3つ目の理解は、「他者理解」です。道徳的価値を実現したり、実現できなかったりする場合の考え方や感じ方は1つではなく、多様であるということを前提として理解していくことです。具体的には、「正しいと思ったことをやる時、相手のことを思ってやることもあれば、正しいからやらなければならないと思うこともあり、いろいろな考え方があるんだなあ。」「親切にできないときにも、恥ずかしいから、誰かがやるだろうと思うから、自分の用事で急いでいるからなど、いろいろな考えがあるんだなあ。」などが考えられます。

道徳科では、この3つの理解について、学習します。

これまでの道徳科の授業の実態を見ると、「他者理解」に弱さを感じます。教師と児童の一问一答の授業ではなく、児童が主体的に、仲間と考え方や感じ方と比べながら、人間理解や価値理解をしていく授業をめざしていくことが大切です。



# Q5

## 道徳科の目標の中の「自己を見つめ」とは、どのように考えたらよいのでしょうか。

1

道徳教育と道徳科の目標

自己を見つめるとは、自分との関わり、つまり、これまでの自分の経験やそのときの考え方や感じ方と今の自分を照らし合わせながら、さらに、考えを深めることです。したがって、これまでの自分の行為やそのときの考え方や感じ方を見つめ、さらに、そのときのことを今思うとどうであるのかを見つめ、こうすればよかったとか、そのことを思うと自分は、まだこんなところに課題がある、こんなことをさらに伸ばしていきたいなどの目標を見つけたりしながら、考えを深めることとなります。このようにして、これまでの自分と今の自分について見つめます。これからの自分については、今の自分を見つめたとき、これからの実践意欲や態度について表出されることでしょう。ここで、無理にこれからの自分を引き出そうとすると、どの児童も「自分は～していきたい。」「これからは、〇〇のようにしていきたい。」という型にはまった表現になるおそれがあります。

また、ここでは、自己を見つめる発達の段階を考慮して、めざす姿を明らかにしていかなければなりません。一人ひとり、自己を見つめる力は異なりますが、おおよその発達の段階を踏まえた、自己を見つめるときにめざす姿をもつことが大切になります。発達の段階を踏まえ、一人ひとりがめざす姿をもつことは、指導・援助の具体化にもつながります。

さらに、教材等（ある特定の場面や状況）を通して、自分との関わりを考えることも、自己を見つめることの1つです。教材等で、道徳的価値の理解（価値理解、人間理解、他者理解）を図るとき、児童一人ひとりがこれらの理解を自分との関わりの中で捉えることが大切になります。

そのために、教材の中に入り込んでいけるような教材提示を工夫したり、登場人物になりきって語るができるように指導したりします。また、仲間の考え方や感じ方と比べて自分はどのように考えたり、感じたりしたのかを表出できるようにする教師の指導・援助が大切になります。

最後に、自己を見つめるときの留意点として、ある特定の場面、状況に留まるのではなく、日常生活で今後出会うであろう様々な場面、状況において道徳的価値を実現することができるよう、道徳的価値の適用の場を広げることが大切になります。そこで、自己を見つめるときには、道徳的価値の適用の場を広げる指導・援助をして、これまでの自己を見つめていくこととなります。

# Q7

「考え、議論する道徳」という用語は、どのように捉えたらよいのでしょうか。

1

道徳教育と道徳科の目標

道徳科の授業において、「考え、議論する」ことが求められてきています。では、具体的にどのように捉えたらよいのか考えてみましょう。

まず、「考え」の捉えです。「考え」とは、「考える」「主体的に」「自分との関わりで」ということが大切になります。つまり、「主体的な学び」ということです。このねらいは、自分の考え方や感じ方を明らかにするということです。道徳科の特質から考えると、自己理解するということです。授業での児童の姿のイメージとして、基本発問に関わって、自分の考え方や感じ方を持ち、進んで表出する姿ということになります。ここでは、児童が考え方や感じ方をもつことができるように、時間を取って考えさせることが大切になります。

次に、自分の考え方や感じ方をもとに、「議論する」です。道徳科での議論とはどういうことでしょうか。それは、多様な考え方、感じ方と出会い、交流することで、他者理解をしていくことです。言い換えると、「対話的な学び」ということです。仲間の考え方や感じ方に出会って、自分の考え方、感じ方をより明確にすることで、確かな自己理解につながります。そして、「深い学び」が生まれます。

授業での児童の姿のイメージとして、グループ学習をしたときで考えてみましょう。グループ学習で基本発問に関わって、自分の考え方や感じ方を発表し、その後、グループの仲間の考え方や感じ方を聞き、それによって、今の自分の考え方や感じ方がどう変わったかを発表するという姿になります。さらに、児童の発言で具体化すると、「私は、恥ずかしいという気持ちをもっていただけ、〇〇さんの『誰かが助ける。』という気持ちを聞いて、それも私にはあるなあと思いました。恥ずかしいという気持ちと誰かが助けるという気持ちが今の私にはあります。」ということになります。議論することを通して、学びが深くなったことがわかります。

すべての教科に共通していた「アクティブ・ラーニング」というキーワードが、「主体的、対話的で深い学び」というキーワードに変わってきています。道徳科にも、「考え、議論する道徳」の中に、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」が含まれていることがわかります。

# Q 12

道徳科の特質を生かした基本的な学習指導過程とは、どのように考えたらよいのでしょうか。

2

道徳科のねらいと学習指導過程

	学習指導過程	指導上の留意点
導入	<p>○ねらいとする価値への方向づけや教材への橋渡しをする。</p>	<p>○ねらいへの方向づけや自分との関わりがもてるように、教材における考える視点を明確にする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・主人公を明示したり、登場人物の人間関係、時代背景等を解説したりして教材の理解を援助する。</li> <li>・生活面から導入し、生活経験を問いかけるときは、導入で重い雰囲気にならないように失敗経験は問いかけない。</li> </ul>
展開前段	<p>○教材を通して、一人ひとりが主人公の生き方から道徳的価値を追求し、把握する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・感想、問題を出し、追求課題をもつ。</li> <li>・主人公の苦悩や葛藤を自分との関わりで考え、人間理解をする。</li> <li>・主人公が克服していく考え方や感じ方を捉え、価値の意義を理解する。</li> <li>・主人公の喜び、悲しみなどから価値のよさやすばらしさを理解する。</li> </ul>	<p>○主人公の立場になって考え、共感しながら、ねらいとする道徳的価値について他者理解を通して自分との関わりで人間理解や価値理解を深める。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中心教材は、原則としてその時間に与え、価値追求する。</li> <li>・基本発問はどの理解の基本発問なのかを明確にして、3、4問準備する。</li> <li>・あらすじや状況を聞くことは道徳科の特質からずれているので聞かない。</li> <li>・挙手発言だけでなく、意図的指名によって多様な考え方や感じ方を引き出すとともに、一人ひとりの考え方や感じ方に気づかせる。他者理解から自己理解を大切にする。</li> <li>・発言の根拠を大切にし、一人ひとりの考え方や感じ方の違いを比べることによって他者理解を深め、確かな自己理解を図る。</li> </ul>
展開後段	<p>○教材から離れて、高められた価値観から一人ひとりが自己を見つめる。</p>	<p>○教材から離れて、自己を見つめ、ねらいとする価値を自覚できるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の経験、そのときの考えや気持ち、今の自分の考えや気持ち、自分の傾向性、自己の課題を見つめる。</li> </ul>
終末	<p>○ねらいとする価値の整理、まとめをする。</p>	<p>○児童のねらいに関わる高まった行為、格言、ことわざ、作文、教師の体験等でねらいとする価値のまとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・押しつけにならないようにする。</li> </ul>